

# 審査結果報告書

平成 2018 年 8 月 30 日

主 査 氏 名

山下 拓



副 査 氏 名

武田 啓



副 査 氏 名

三枝 信



副 査 氏 名

茂刺 靖



1. 申請者氏名 村上 泰清

2. 論文テーマ : Impact of body mass index on the oncological outcomes of patients with upper and lower urinary tract cancers treated with radical surgery: A multi-institutional retrospective study  
(根治手術療法後尿路上皮癌患者における BMI が予後に与える影響に関する多施設共同研究)

3. 論文審査結果 : 北里大学関連病院 6 施設において、1990 年～2015 年までに外科的治療が行われた腎盂・尿管癌、膀胱癌症例のうち、術前化学療法例および遠隔転移例を除く 727 例を対象に、術前の肥満度を表す体格指数である BMI (Body mass index) と予後との相関を検討した多施設共同の後方視的研究である。BMI は WHO 分類に基づき underweight 群 ( $<18.5\text{kg/m}^2$ )、normal 群 ( $18.5\text{--}25\text{kg/m}^2$ )、overweight 群 ( $25.1\text{--}30\text{kg/m}^2$ )、obesity 群 ( $>30\text{kg/m}^2$ ) の 4 群に分類し検討された。その結果、短変量解析では、overweight 群は腎盂・尿管癌および膀胱癌における有意な CSS(癌特異的生存率)良好な因子 ( $p=0.031$ ) であり、obesity 群は有意な予後不良因子 ( $p=0.02$ ) であった。さらに obesity 群は OS(全生存率)においても有意な予後不良因子 ( $p=0.04$ ) であった。多変量解析では、膀胱癌において overweight 群は独立した CSS 良好因子 ( $\text{HR } 0.37, p=0.029$ ) であり、obesity 群は独立した CSS 不良因子 ( $\text{HR } 7.47, p=0.002$ ) であった。一方、腎盂・尿管癌においては BMI は有意な独立した予後因子ではなかった。以上が研究結果として報告された。

一方、本研究の限界として、①癌の予後のマーカーとして検討する際の BMI のカットオフ値の決定方法の妥当性、②BMI は身長により同じ体格でも異なってくる点、③栄養状態等を示す他のマーカー候補 (血清総蛋白、アルブミン、血球数、Glasgow prognostic score 等) との有用性の比較が行われていない点などについての指摘もあった。

以上のように、本研究には今後検討されるべき課題を残しているものの、術前の栄養状態を簡便に反映する因子である BMI が腎盂・尿管癌、膀胱癌の予後予測に一定の貢献を示す可能性を、多施設共同の多数例を対象としたデータ収集・統計解析によって示唆した点は新しい知見であり、今後の治療方針の再考にも寄与しうる有意義な研究であると評価された